

枕草子（まぐらのそうし）

平安中期、996年（長徳2）ころから1008年（寛弘5）ころの間に成立した日本最初の随筆文学。作者は清少納言。一条天皇の中宮定子（藤原定子）に仕えていた清少納言は、996年秋、中宮の一家と対立し容赦ない圧迫の手を加える左大臣藤原道長方に内通しているとのうわさにいたたまれず、中宮のそばを離れて長期の宿下がり閉じこもった。そして、たまたま中宮から賜った料紙に、木草鳥虫の名や歌枕などを思いつくままに書き続けることによって気を紛らせた。これが原初狭本類纂型の《枕草子》である。偶然、と記されているが、半ばは意識的に右近中将源経房の手を経てこれが世人の目にとまり、意外な好評を受けて、次々と書き続けていった。ところが、1000年（長保2）12月16日定子が亡くなるに及んで、その3人の遺児修子、敦康、蒲子は道長の手引き取られて中宮彰子（上東門院）の庇護の下に育てられることとなった。定子生前につらく当たった道長方の人々の、3人の遺児に対する手厚い待遇を願って、亡き定子のすばらしい人柄を筆を尽くして書き上げたのが、完結広本雑纂型の《枕草子》である。《枕草子》の文章は、〈回想〉〈随想〉、物名類聚的な〈類想〉の三つの様式に大別することができるが、類想に始まって随想・回想に移るもの、随想の中に回想を交じるもの、年代の先後を問わず自由に回想するものなど、きわめて自由な連想のおもむくままに書き続けられたものが多い。各章段の間にも、微妙な連想の糸筋が貫いているので、やはり雑纂形式のものを、作者が最終的に世に問うた作品とみななければならない。

今日に伝わる《枕草子》の証本は、雑纂型の3巻本と伝能因所持本、類纂型の前田本と堺本の四つに分けられるが、上述のような作者清少納言の自由な連想の糸筋と緻密な文章構成が見られるのは、3巻本ことにその第1類の証本においてである。伝能因所持本、前田本、堺本などは、後世の者の手によって改編され、増補や除去、改訂の加えられた不純な本文でしかない。3巻本《枕草子》によってみる限り、作者清少納言は、自然と人生とに対して実に鋭い観察と深い理解、限りない愛着と容赦ない批判とを表明したまれにみる天才であったといえよう。内大臣藤原伊周（これちか）が一条天皇と中宮定子とに美しい料紙を献上したとき、天皇方ではそれに《史記》を書写したが、何を書けばよからうかとの中宮の質問に対し、〈枕にこそは侍らめ〉と答えてその料紙を賜ったと、《枕草子》成立の由来を清少納言自身が跋文に書き残しているが、それは跋文にありがちな虚構にすぎない。ただそこに、経房の手を通じてはからずも世上に流布したとあることだけが真実であって、清少納言が、経房を通して左大臣道長の目にこの作品が触れることを願い、中宮方から道長方へ転身することを期待していたとしたら、やはり世間のうわさにはなにがしかの根拠があったといわねばならない。しかし道長は清少納言を召そうとはせず、したがって結果的にこの作品は現在の3巻本にみる完結広本雑纂型《枕草子》にまで成長発展したのである。